

## 追悼



### 故 和田博義 先生 略歴

(昭和2年7月12日生～平成19年8月2日没)

#### <学歴・職歴>

昭和27年 4月 新潟大学医学部入学  
昭和31年 3月 新潟大学医学部卒業  
4月 新潟大学医学部附属病院にてインターン  
昭和32年 4月 新潟大学医学部小児科学講座(小林 収教授)入局  
昭和36年 3月 医学博士(新大院医博第 55 号)  
昭和38年 3月 新潟大学大学院医学研究科(内科系小児科学)修了  
昭和36年 4月 新潟大学医学部助手  
昭和42年 7月 新潟大学医学部講師  
昭和52年 4月 新潟大学医学部助教授  
昭和52年 7月 兵庫医科大学教授

#### <学会役員>

日本小児科学会理事, 評議員  
日本腎臓学会理事, 評議員, 功労会員  
日本小児腎臓病学会理事, 評議員, 監事

#### <学会会長>

第 20 回日本小児腎臓病学会会長(昭和 59 年)  
第 2 回近畿小児科学会会長(平成元年)  
第 21 回日本腎臓学会西部部会会長(平成 3 年)

#### <厚生省研究班>

昭和52～54年度 厚生省小児慢性疾患研究班「小児尿路感

染症に関する研究」(班長 小林 収)班員

昭和55～57年度 厚生省特定疾患「腎糸球体障害調査研究班」(班長 武内重五郎)班員

昭和58～60年度 厚生省特定疾患「進行性腎障害調査研究班」(班長 大野丞二)班員

昭和61～平成 2 年度 厚生省特定疾患「進行性腎障害調査研究班」(班長 東條静夫)班員

昭和58～59年度 厚生省心身障害研究「小児慢性疾患の診断・治療・管理に関する研究」(主任研究者 植田 穰)―「慢性腎疾患の診断・治療に関する研究」(分担研究者 酒井 糾)研究協力者

昭和60～62年度 厚生省心身障害研究「小児慢性腎疾患の予防・管理・治療に関する研究」(総合班長 石丸隆治)班員

昭和63～平成 2 年度 厚生省心身障害研究「小児腎疾患の進行阻止と長期管理のシステム化に関する研究」(主任研究者 石丸隆治)班員

#### <文部省研究>

平成 3～5 年度 科学研究費補助金[一般研究 C]研究課題「逆流腎症における糸球体硬化機序とその早期発見・治療法に関する研究」(課題番号 03670515)

## 小児腎生検のパイオニア 和田博義先生を偲んで 「得意澹然，失意泰然」

兵庫医大小児科教授

谷澤隆邦

「得意澹然，失意泰然」は和田先生のお好きな言葉でした。中国明代の崔銑の格言，六然訓の一節です。得意絶頂時でも威張らずあっさりしている，うまくいかない時でも，ばたばたしないで落ち着いて対処するという意味でしょう。人に頼まれるとよく色紙に揮毫しておられました。先生ご自身も端麗な字を書かれ，達筆でした。最近とみにこの言葉に教えられ，共鳴することが多くなりました。人としての生き方，姿勢を説く言葉で，小生も座右の銘にさせてもらっております。卒業後から 35 年間絶えずご指導をいただいたことを誇りに思い，深甚なる感謝の意を捧げるものであります。

先生は昭和 31 年新潟大学医学部をご卒業，インターン修了後小児科学講座に入局されました。そこで小児腎臓病学の泰斗 故小林 収教授との運命的出会いがあり，新生小林教室の初めての大学院生として医学研究科へ進学されました。当時，新潟大学医学部第二内科では故木下康民教授のもと，本邦で初めての腎生検が行われていたことから，小児腎生検のパイオニアとして活躍されました(昭和 33 年，医学のあゆみ)。学位論文は「小児急性糸球体腎炎に関する臨床的ならびに実験的研究」であります(昭和 36 年，日本腎臓学会誌)。

爾来，ご自身で 2,000 例を超す腎生検を施行され，腎摘などの重大な合併症がなかったことはエコーなどのモニターのない時代ではまさに奇跡的で，凡人が到達しえない名人芸であります。慎重で綿密なご性格が幸いしていたと思われまます。

腎生検手技を会得するために全国から訪ずれ先生に直接ご指導を受けられた方々が，その後の小児腎臓病学の進歩に大きく貢献されたことは間違いのない事実であります。

故小林 収先生の右腕として，小児腎疾患の病理と臨床の解析に多大の貢献をされました。それまでは剖検例でしかみることのできなかつた腎病理組織像が明らかになり多くの新事実が発見されました。特に急性糸球体腎炎の免疫沈着物，上皮下高電子沈着物，いわゆる hump が経過良好例では基底膜内に沈み込み，埋没 hump となって消失します。さらに，臨床的治癒，すなわち尿所見の消失から免疫蛍光抗体法での免疫沈着物の消失まで 2~3 カ月の時間的ずれがあることを実証されました。また，臨床像と腎組織像の乖離を実証されました。現在では患者さんの同意を得ることは不可能で，貴重な臨床病理成績です。また，臨床的には浮腫，乏尿，高血圧など急性腎炎症状を認めるも，尿所見はないか軽微である例があります。しかし，溶連菌関連抗体が上昇し，別経路活性化の低補体血症が認められ，腎組織にても管内増殖病変を伴う一群を「腎外症候性急性糸球体腎炎」と報告されました。

ISKDC(国際小児腎臓病研究班：班長 Dr. Barnett)に日本からの代表委員として参画された故小林 収先生のデータを一手に整理され，ネフローゼ症候群のステロイド治療と腎組織像との関連，免疫抑制薬のアザチオプリンあるいはシクロフォスファミドとの併用療法の価値など二重盲験法にて世界で初めて客観性のある成績に大きく貢献されました。新潟大学からの例数が最多であった，と聞いております。また，その病理検討会で病理学者の Dr. Churg が標本を見て，腎生検の軌跡が一定で糸球体数が多いことに驚嘆，絶賛されたと聞いております。

アレルギー紫斑病性腎炎についての記載は当時ほとんどなく剖検例のみで、その詳細について小林先生とともに精力的に発表されました。その臨床像と腎病理組織像の詳細を集大成された小林先生の著書「Henoch-Schönlein 症候群と鑑別診断」(宇宙堂八木書店)に詳しいですが、膨大な資料は和田先生のご貢献です。この内容は Dr. Hamburger の腎臓病学教科書にも引用され、300 例を超える症例数は当時世界最多です。

先生との出会いは「螢の光」でした。蛍光抗体法を教えていただき、腎生検組織を染色したことに始まります。IgA 腎症については急性腎炎の遷延型とされていた症例に強い IgA 沈着がメサンギウムパターンで多数例に認められ、はっきりした溶連菌感染の証拠もなく、低補体血症も伴わないので、遷延性糸球体腎炎には疑問を感じておられました。フランスの Berger 先生が独立した疾患、IgA 腎症として 1968 年に Lancet 誌に報告されたことを残念に思っておられました。

血尿が糸球体基底膜からまさにすり抜ける場面の電顕写真を報告されました。現在まで、同様な写真は他にあまり例をみません。まさに執念の成果であります。小児泌尿器科を専門にされた生駒文彦教授との共同研究で逆流性腎症の糸球体硬化病変の形成に糸球体肥大が先行することを見出されています。

日本腎臓学会では永年評議員を務められ、あり方委員会、栄養委員会委員を歴任されました。栄養委員会では小児の腎疾患の食事基準の作成に貢献されました。

先生は、「麒麟ラガービール」と「牛たん」をこよなく愛されました。それ以外のビールは決して口にされない頑固一徹な職人のような風情を醸し出されていらっしゃいました。仙台では牛タン元祖「太助」にご一緒したことも懐かしい思い出であります。また、関西のお生まれでありましたが、こよなく新潟の天地人を愛しておられました。関西に新潟の灯をともし続けられました。

思い起こせば先生とお会いしてから足掛け 35 年になります。不肖の弟子ではありましたが、永年のご厚情に感謝し、ご冥福を心よりお祈りするばかりです。今ごろは先に逝かれた小林 収先生、岡田敏夫先生とともに、極楽浄土でお好きな言葉であった「はんなりと」お過ごしのことでしょう。合掌。